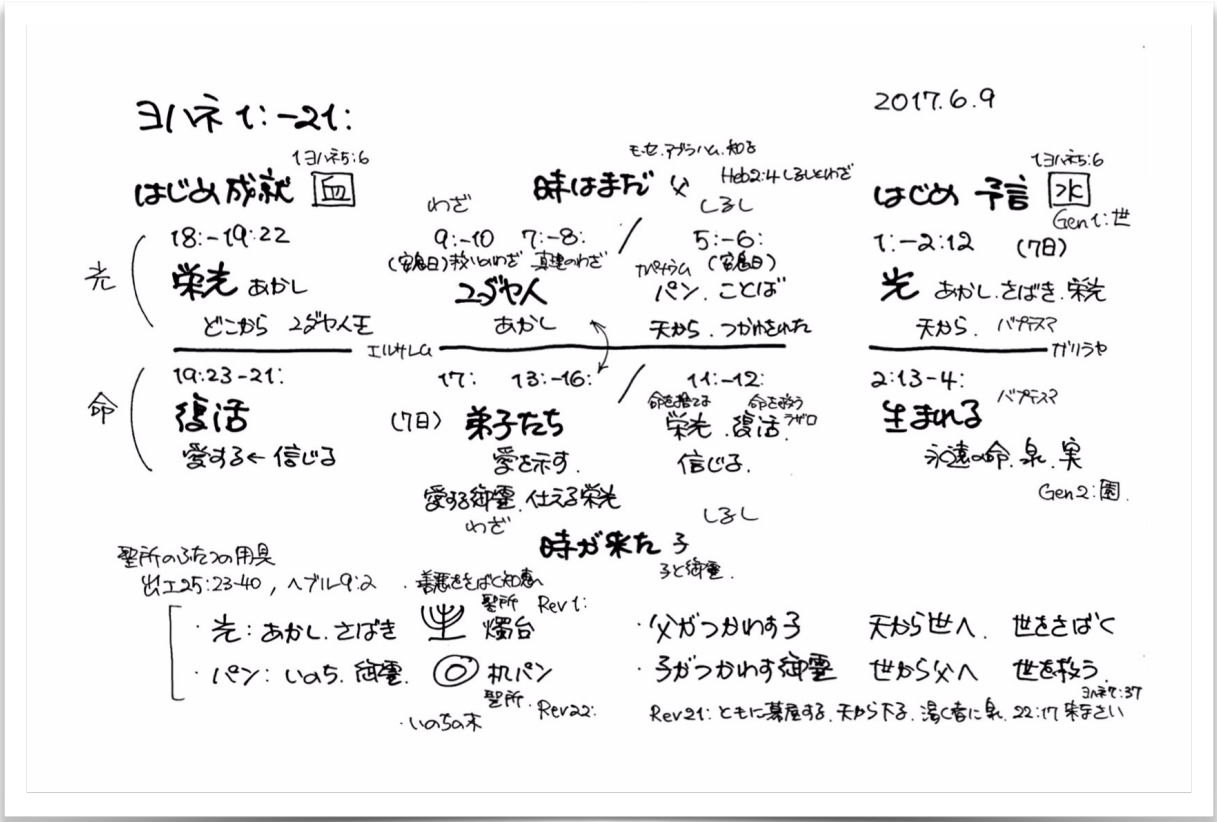
ヨハネ福音書 1-21章



ヨハネ福音書、1章から21章の分析をしてきました。全体に繰り返しが多いので、比べて読むには、比べるところがありすぎて目が回りますね。構造はないという人がいるぐらい構造分析は難しいと言われている書物です。全体がキアスマスになっていると言う人がいますけれど、なっていないんじゃないかと思います。もっと複雑な、もっと美しい構造だと思っています。

全体をこの表でいうと6つの段落に分けています。最初の2つ、次に真ん中に2つ、最後に2つという形です。はじめ光としてきました。光であることばです。バプテスマを受けて永遠のいのちがあたえられる。よみがえります。永遠のいのちの泉が与えられるというような、はじめの預言のところと、いよいよ成就の時が来るという18章からのところ。真ん中には「時はまだです」ということを言って、ユダヤ人たちに話しているところと、「いよいよ時が来ました」と言って弟子たちに話しているところというように分かれていると思います。大きな全体を結ぶキーワードとして、「光」と「いのち」。光として来る。永遠のいのちが与えられる。栄光を表す話と、永遠のいのちを与えること。十字架に付くという話は、それは栄光の時なのですね。栄光の時、そして復活していのちを与えますというこの「光」と「いのち」というのが全体の大きな2つのキーワードになっていると思います。

それは、聖所の2つの用具、幕屋、聖所、至聖所。その聖所の部分にある祭司が取り扱っている2つの用具です。その2つを全体として表しているかなと思います。

ヨハネ福音書は、ほとんどが祭りの場面です。「祭りでエルサレムに行って」というところばかりです。過ぎ越しの祭り、仮庵の祭り、宮清めの祭りで、また過ぎ越しの祭りと。そして安息日の話もあります。はじめの7日の創造があって、新しい7日間の創造。弟子たちをつくるというところが、新しい創造ということですね。「過ぎ越しの祭りの6日前に」というところから始まっているところです。そのヨハネ福音書全体の大祭司としておられたキリスト。父の子として、父を表すものとして、聖なる者としてこの世に来られたキリストの働きを話していますので、この聖所の用具2つの象徴というのが全体を表しているものとしてふさわしいであろうということが言えると思います。

燭台とパンの机、12個の輪形のパンが置いてある机が、聖所の北側と南側に配置されています。2つの用具の話は、3つあるんじゃないのかと。香壇もあるのですけど、香壇はどうも、至聖所側に属する用具が、聖所の所にいて見えているというなものなのだろうと思われます。

ヘブル人への手紙9章に「幕屋が設けられ、その前の部分のところには、燭台と机と供えのパンがありました」ということを言っています。金の香壇は、至聖所側に位置しているようにここでは記録されています。確かに出エジプト25章で、その作り方を話している時に、契約の箱の話をします。その次にパンを置く机、テーブル。次に金の燭台。机と金の燭台と、天幕の幕の方の話に変わっていきます。香の壇は30章に書かれていて、これはアロンが働くときに使うもののような位置付けで書かれているようですので、どちらかというと大祭司の使うものということなんでしょうか。大きくこの聖所の中で、ここで言われているのが、2つの「燭台」と「パン」ということです。この燭台とパンは、何を表しているのかということなのですが、「光としてきました、証しするため、さばき、栄光」というようなキーワードが見られますね。光で照らすと全てが明らかにされるという意味で、さばき。栄光が現されると汚れているものが死んでしまうのですね。その栄光が現されて、全部が明らかにされますという話。もう一方は、永遠のいのちが与えられる、泉があって実を結ぶ、新しく生まれる。永遠のいのちという方はパンの話ということで見てみると、その燭台は、特にさばき、善悪をさばく知恵、全世界を照らす光、7つの御霊の光でさばきが宣言される。それで善と認められた信じる者には、いのちのパンが与えられるというのがパンの方ですね。こちらはいのちの木。善悪の知識の木(燭台)といのちの木(パン)を表しているかのようなこの2つではないかと思われます。

1章から2章12節までが7日間なのですけど、こちらは創造の七日間。2章13節から4章の方はどちらかと言うと、創造の7日間の6日目、7日目の園の話です。世を創ることと、園を創ることが、このはじめの預言と言われている所にもある通りです。この園の中にいのちの木がある。いのちの水が流れているということです。それは同じヨハネが書いたと言われている黙示録にもあります。黙示録の書物の最初は、7つの御霊から、それで金の燭台を持っている方が歩くのですね。そして、7つの手紙が送られていくというところから、みことばによるさばきの宣言が始まって、黙示録のいちばん最後のところで、都、新しいエルサレムが天から下ってきて、幕屋が人と共にあるというところです。その都の中央には、いのちの水の川と、いのちの木がある。ともしびの光、太陽の光はなくて、神である主が光そのものであるというところで終わります。そこで、この「燭台」で始まって「パン」の話で終わっていくのですけれども。この最後の最後に、「御霊も花嫁も言う。『来てください。』これを聞く者は『来てください』と言いなさい。乾く者は来なさい。いのちの水が欲しい者は、それをただで受けなさい。」これは７章にある仮庵の祭りの大いなる日にイエスが叫ぶ「乾いている者は来なさい。命の水を飲みなさい。」と言って呼びかけるところが、この7章の中にもある通り、御霊と花

嫁が話している「いのちの水」というのが園の中央にある。黙示録自体は、仮庵の祭りの成就の書物。主が共に住んでくださるということの成就の書物だということも言えると思いますし、ヨハネ福音書自体が、新しい聖所で仕える大祭司であるイエス様を表してるものだということも言えると思いますので、この黙示録の全体を指すような2つの用具、2つのキーワードでこの書物が構成されているのは妥当かなと思います。ここに黙示録21章の箇所が書いてあります。来てくださいと言ってるところは、ヨハネ７章37節です。

最初のこの創造と、新しい創造。預言と成就と書かれているところの最初の4章までのところは、水のバプテスマ。18章からのところは血によるバプテスマということだと思います。ヨハネ第1の手紙５章５節に「世に勝つ者とは誰でしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。このイエスキリストは、水と血とによって来られた方です。ただ水によってだけでなく、水と血とによって来られた。そして証しをする方は御霊です。御霊は真理だからです。その御霊と水と血はひとつです。」ということを話していますけれど、最初のこちら(創造)は「水」、こちら(新しい創造)は「血」ということを、この水と血によって来られたということで表しているのかなと思われますので、ここに水と血と書いてあります。

光といのち。栄光の光と復活のいのちということに囲まれている中に、「時がまだ」と「時が来た」なのですけど、ここに教えがあるのですね。教えがあって、どちらかでいうと上側は父。下側は子、子と御霊。父が子を遣わした。天から遣わされた。父と子は一つですというなことが上のこのユダヤ人という方に証ししている方です。

弟子たちに表す時にはもっと近い。イエスキリストとイエス様と弟子たち、特別の愛という事で、御霊の祝福が豊かにあるということですね。信じる者にさらに明らかにされるという区別があるかと思います。5章から10章まで、11章から17章までが、あまり並行してるように見えないのですけれど、よくよく見るとこの17章の大祭司の祈りと言われている祈りの中にも、この5章から10章までで言われてる言葉がいろいろ入っていたりします。ですので、この5章から10章と、11章から17章は、実は並行しているということを指す印はいっぱいあります。それは別の形で見ていかないといけないということなのですが、上の段は父、下の段は子が中心に言われているところだと思われます。父と言っているところと、子と言ってるところがこの2つに分かれていますね。5、6章と、7章から10章。11、12章と、13章から17章と分けているのですけど、この２つの区別は非常に分けにくかったです。ここは、ヘブルの2章の4節で「そのうえ、神も、しるしと不思議と様々の力あるわざにより、また御心に従って精霊が分け与えて下さる賜物によって証しされました」。これは、証しをしているわけなのですけど、しるしと不思議と力あるわざ。似ているものだと思うのですが、しるしとしての奇跡と、力を表すわざ。「しるしとわざ、しるしとわざ」といういうように分けてみるのが良いのではないかという提案です。

5章と6章、ことばは神から遣わされた。天からパンが降ってきたというのが、5、6章ですね。7章、8章は仮庵の祭りで、9章10章は盲人の話と羊の門、羊飼いですという話なのですが、ここも分けにくかったです。この11章からのところは、ラザロと命を捨てて栄光の時ですよ、いよいよ時が来ましたと弟子に教えますから、分けられるのはわかりやすいかと思います。11、12章は信じること。13章から17章は愛を示しましたということは、わかりやすいかと思います。このところ(真ん中上段)の区別は難しかったのですが、しるしの話をして、天から遣わされた言葉だと。天から降ってきたパンだと。それと、この真理のわざ天の父と一つです。9章10章も天の父と一つですいうことが共通しているところです。真理のわざをしている。悪霊、悪魔も出てきますね。偽り

じゃない、真理のわざである。それと盲人の話も光の話なので、光という面が強調されているかのようにも見えるのですが、世の光は8章と9章にあります。ただ、9章10章の方は、救いのわざ。罪があるのならその人は救うことはできませんねという話と、いのちを捨てるという救いのわざ。これが父と一つですということを表してる。真理ですということと、救いのわざ。これがユダヤ人に証している父と子の一致について話して、2つの側面かなと思われます。

この上の段にはモーセ、アブラハム、父を知るというようなことがずっと出てきますので、こちらは父側。子と言ってる下の段のほうは最初のラザロ、エルアザルの復活のところから見てわかるように、主が愛していたラザロ。主が愛している者たちということですので、父が愛しているというよりは、主が愛している。その愛は父からのものなのですけど、それを具体的に表してくださいました。そのしるし、主が愛してるよということを表すしるし。それと弟子たちに愛を示しました。その２つが愛を示す時に現れていて、足を洗いあいなさいと仕えることによる栄光。それと愛する御霊による一致というのが、この弟子たちに愛のわざを教えてくださったという段落になってるのかなというふうに思われます。

ですから、ヨハネ福音書全体が新しく生まれる、新しい民の創造について教えてくれて、キリストと教会の結婚ということがそのテーマですので、カナの婚礼の奇跡から始まって、いのちを捨てたキリストの栄光が、新しいいのちを与える復活というところで終わり、私を愛しますかという愛の教えで、このヨハネ福音書が閉じられていくという全体の流れの中で、特に、この聖所２つの燭台とパンですね、それと父と子、御霊ということが、全体の区別するためのキーワードなっているのではないかと思われます。